撮影場所◎佐久間さんが管理する柿畑（鶴岡市）

奏（かな）であう人 vol.45

松本（まつもと） 友哉（ともや） さん（酒田市）

◎山口県美祢市生まれ。大阪の大学でデザインを学び、進路を決める時期に東日本大震災が起きる。ボランティア活動に参加したことから、都会より田舎でデザインを活かしたいとの思いが生まれた。高知県でのインターンを経験後、「緑のふるさと協力隊」をきかっけに、2012年から飛島に移住。友人たちと「合同会社とびしま」を設立。地域の力を活かした雇用創生を目指し、さまざまな取組みを実践している。

佐久間（さくま）麻都香（まどか） さん（鶴岡市）

◎宮城県仙台市生まれ。山形大学農学部卒業後と大学院進学後の2度にわたり、アフリカでの農業普及に従事。その後、鶴岡市に定住し、一年間の農業研修を経て、様々な仕事をする傍ら、柿畑を管理することとなる。現在、放置された柿の木を活用した小さなビジネスを考える「柿守人（かきもりびと）」の代表として活動中。夫とヤギ4頭、ニワトリ4羽、ウサギ2羽、ネコ2匹、リス1匹と暮らす。

keyword

若者たちの移住が活気の始まり

暮らしと産業を結びつけ、人々の役に立つ“ナリワイ”※を通して、
自らの生活も成り立たせていきたい。
そんな思いと活動で、地域に元気を生み出す
Ｉターンのお二人に話をお聞きしました。

平成29年度「合同会社とびしま」スタッフ（前列中央が松本さん）。出身地はそれぞれ飛島、県内、東京都、栃木県、山口県と幅広い地域からU・Iターン。さらに今年度から県内・宮城の2人が加わり、20～30代の計10名で活動している。

佐久間さんが山中の柿の木から、お茶用として無農薬の葉を採取している様子。大切な「庄内柿」の農文化を受け継ぎ、発信していきたいという思いから、平地にある柿畑とあわせ、管理が行き届かなくなった農地を借り受けている。

地域に暮らす それぞれの思い

アフリカでの農業普及活動を通して、「農業は生きることに直結している」と実感した佐久間さん。自分にできることを模索する中で、手入れが困難な柿畑に出合い、「柿守人」の活動を始めたと言います。

「現在は、全部で42本の柿の木を管理しています。実を採るだけでなく、青い実から柿渋を、柿の葉から柿の葉茶を、さらに干し柿作りなどさまざまなことにチャレンジしています」。

一方の松本さんは、東日本大震災を機に東北でのボランティアに参加する中で、地域が本来持っている力強さに引かれ、「緑のふるさと協力隊」として飛島へ来たと言います。

「隊員期間の1年間、島のあらゆる仕事を手伝いながら、新しい雇用を作り出したいとの思いで、ほかのU・Iターンの友人たちとともに合同会社とびしまを立ち上げました。副代表として全体を見ながら、専門に学んだデザイン面での業務を担当しています」。

さまざまな活動や仕事を通して 地域の役に立ちたい

合同会社とびしまは現在10人ほどの社員数ですが、将来的には、100人規模の雇用を目指しています。さらに1000人単位の、いわゆる「飛島サポーター」を作りたいという目標を掲げ、島内に限らず、全国へ会社PRの範囲を広げていきたいと考えています。その活動について、松本さんが話を続けます。

「会社の事業は、カフェや島の駅とびしまでの飲食提供やお土産販売、観光ガイド、島でのボランティア、伝統行事への参加など多岐にわたります。今年から宿泊施設の経営も始めました。個人的には、漁業権を取得し、サザエ漁を始めました」。

佐久間さんがこれに応えます。

「私もさまざまな仕事をしています。生活と仕事を区別せず、農業を通した複数のナリワイビジネスで必要なお金を得ながら、地域の困りごとの解決などに役立つことができればと思います。それらには、お金に換算できないものがありますから」。

活気が生まれつつある 確かな実感

松本さんも地域に役立ち、活気をもたらすことの大切さを話します。

「島には、高齢化や過疎化へのあきらめムードがあります。ですが、産業や文化、暮らしなど、島に魅了された若者が増えることで、確かに活気を取り戻しつつあります」。

「私は10年ほど空き家だった家に住むことになり、その時に地区をあげての歓迎会を開いてもらいました。これをきっかけに地域の交流会が今も継続していて、皆さんがとても喜んでくれています」。

地域の魅力は自然環境もありますが、何よりも、人と人との繋がりや新しい出会いにあると佐久間さんは話します。

お二人とも、若者たちがU・Iターンをきっかけに地域の暮らしに溶け込み、ナリワイを活かしながら自らが動くことで、地域の人々に新しい変化や活気が生まれていることを、日々感じています。

※ナリワイ：地域の課題を趣味や特技を活かして解決する小さなビジネス